

三省堂 国語辞典

第二版

金田一京助

金田一春彦

見坊豪紀

柴田 武

山田 忠雄

三省堂

協
力

編
集

教仁 愛 女子 短期 大 授学	教図 書 館 情 報 大 授学	富 山 大 学 教 授	教東 京 女 子 大 学 授学	教お 茶 の 水 女 子 大 学 授学	静 岡 大 学 教 授	主 幹	元 日 本 大 学 教 授	文 埼 玉 大 学 博 士 授	文 上 智 大 学 博 士 授	文 学 博 士
若わか	酒さか	都つ	進ん	市いち	日ひ	見けん	山やま	柴しば	金きん	金きん
杉すぎ	井い	竹づく	藤とう	川かわ	野の	坊ぼう	田だ	田た	田だ	田だ
哲てつ	憲けん	通つ	咲さき		資すけ	豪ひで	忠ただ	一いち	一いち	京きょう
男お	二じ	雄お	子こ	孝を	純ずみ	紀と	雄お	武む	彦ひ	助すけ

序 文

三省堂国語辞典第二版は、小学校五、六年生から中学高校生、家庭の主婦から一般社会人と、幅広く使えるようにくふうした、現代語本位の国語辞書であります。

用語と表記は、おとなの辞書と子ども辞書との間をつなぐものでありながら、しかも見出し語は一般社会人、家庭人をめぐる言語の全分野に広がるものでありたい、と念じました。そして、この二つの線が一致合体する場所として、家庭でのことばの学習と確認、という場面を想定したのであります。これは、第一版以来守って来た、この辞書の根本方針であります。

この第二版が第一版にくらべて根本的に変わった点は、第一版刊行と同時に開始した現代日本語の用例採集にもとづいて、見出しや意味の追加と削除、内容の改訂などを客観的に行なったことでもあります。

その他いくつかをあげますと、

- 1 見出しは六万二千。その中に新項目一万二千をふくむこと。
- 2 語釈の用語と漢字は、小学校六年生を基準としたこと。
- 3 学習漢字（教育漢字八八一字と新たに追加した一一五字）を見出し欄で識別したこと。

4 新しい音訓、新しい送りなを、正式の発表文にもとづき完全に取り入れたこと。

5 いわゆる異字同訓（「足」と「脚」、「柔らか」と「軟らか」など）の書き分けを文字ごとにしめしたこと。

6 敬語・あいさつ、その他のことばの使い方を、随時語釈のあとに注記したこと。

7 文法事項、表記欄を全面的に再検討したこと。

8 国語学の予備知識がなくても容易に引けるように配慮したこと。

以上のとおりであります。

この辞書は、同じ著者たちにより編集された『新明解国語辞典』の弟分にあたります。二つの辞書がたがいに助けあって、それぞれみなさんのお役に立つことを願ってやみません。

最後に、この辞書は、故金田一京助先生のご存命中に刊行されるはずであったことを明記して、先生のご霊前にそなえます。

昭和四十八年十月十五日

編集主幹 見坊 豪紀

第一版序文

三省堂国語辞典は、新しい時代の学生・生徒・社会人の要望にこたえる新しい型の国語辞書です。精選された見出し語五万七千は、現代のことばの生活に役だつ新鮮な項目を豊富にふくみ、いわば現代語辞書の集約版ともいふべき性格を持っています。とくに、毎日の生活にあらわれる日常語・外来語・新語の選択にむだのないことは、この辞書の特色といつてよいでしょう。

この辞書は、いわゆる学習辞書とちがつて、見出し語の数をあまり制限しませんでした。学生・生徒の読み、聞き、話し、書く、ことばの生活は予想以上に広がっています。目や耳を通してふれることばの種類も数もおとなとあまり変わらないくらいです。ですからいちばんたいせつなことは、見出し語を制限することではなくて、見出し語の解説や全体の組織を学習的にすることだと考えました。やさしいことばで数多い見出し語を解説するのは、ひじょうにむずかしいことですが、こうすることによって、おとなもいつそう容易に、いつそう適切に、ことばの本質に肉迫できるわけです。私たちはこの点にいちばん努力をしました。

三省堂国語辞典のおもな特色は、1 見出し語を現代かなづかいで表記したこと、2 教育漢字を識別したこと、3 新送りがな法を完全に示したこと、4 やさしくて適切な解説、5 学習上重要な語を徹底的に検討したこと、6 類語の微妙なちがいを区別したこと、などにあります。

なお、前書きの「この辞書の使い方」についても、使う人にすぐ役だつようにとくべつ注意しました。教室・家庭での辞書の指導や利用の参考になれば、これにこしたことはありません。

この辞書は、『明解国語辞典』の姉妹辞書として、同じ編集者によって企画・編集されましたが、このたびは協力者として、市川 孝・酒井憲二・進藤咲子・都竹つづく通年雄つねお・日野資純すけずみ・若杉哲男（五十音順）のみなさんの力をあおぎました。お礼を申しあげます。また、この辞書のために、直接間接に協力を惜しまれなかつた多くのかたがたにも心からお礼を申しあげ、この辞書が将来ともに発展するためのはげましを与えていただけますことをねがってやみません。

昭和三十五年十月

編集者を代表して

この辞書の使い方

辞書の読み方、ことばのさがし方、目的に応じた辞書のじょうずな使い方などが、やさしくわかりやすく書いてあります。ぜひ読んで、辞書をうまく使うようにしましょう。

一 辞書の読み方

三省堂国語辞典には現代の生活に役だつ、必要で十分な項目が六万二千はいつています。

知りたいことばのさがし方は二以下にくわしく説明することにして、ここでは、三省堂国語辞典の一部を例にとつて、ことばについてのいろいろの知識が、辞書ではどんな順序と形式であらわれるかを説明しましょう。

辞書の形式を理解し、これになれることは、辞書を効果的に使う上でたいせつなことです。

辞書は、一つのことばについて、いったいどれぐらいの知識をあたえてくれると思いますか。——そのことばはどんな漢字で書きあらわすか、かなづかいはどうか、送りがないか、品詞は、意味は、反対語は、……などたくさんあります。次にあげる一覧を見てください。一つの見出し語について、この辞書でわかることがらを、あらわれる順にまとめたのがこれです。全部で三十もあります。こんなにもたくさんあることが、一つのことばについてわかるのです。

くわしいことは、三 目的に応じた辞書の使い方 で実

例をあげながら説明しますから、まず項目だけを読んでいただきます。

- 1 発音はどうか
- 2 外来語かどうか
- 3 接頭語、造語成分などであるか
- 4 現代かなづかい
- 5 語の構成の切れ目
- 6 かなと漢字の対応
- 7 漢字のあて方
- 8 当用漢字かどうか
- 9 学習漢字かどうか
- 10 音訓表にある読み方かどうか
- 11 送りがなの送り方
- 12 歴史的かなづかい
- 13 単語か連語か
- 14 品詞の区別
- 15 活用の種類
- 16 語幹と語尾の区別
- 17 外来語の原語
- 18 特殊な用語の区別
- 19 語源・字源の説明
- 20 解説(語釈)
- 21 同意語
- 22 用例
- 23 用例・慣用語の解説
- 24 反対語
- 25 副見出し・主見出しの関係
- 26 参照項目の指示
- 27 形容詞などの派生形の指示
- 28 対応する語形の指示
- 29 可能動詞の形の指示
- 30 その他

このように、辞書の中には、知りたいさまざまな知識が、一定の順序と約束にしたがってぎっしり詰まっています。

す。たとえば見出し一つにだけでも、なんと六つの知識がふくまれているのです。「一覧の1・2・3・4・5・16を見てください。」

辞書をじょうずに使いこなすためには、辞書の形式に少ししみ、約束のみこむことが必要です。それには、思いついたときに手まめに辞書を引くことです。本を読むとき、人の話を聞いたとき、手紙を書くときなど多くの機会があります。特に、人と話をしていて、おたがいにわからないことが出たときとか、子どもから質問を受けたときなどは、自分の記憶をたしかめ、相手に正しい知識をあたえるための絶好のチャンスです。ぜひ、すばやく辞書を引いて、いっしょに調べるくせをつけましょう。

二 ことばのさがし方

1 見出しにあることばのさがし方

知りたいことばをさがすときは、まず、そのことばが辞書のどのへんにあるかの見当をつけることがたいせつです。いま、「パーベキュー」ということばを例にとつて順順に説明しましょう。

(1) 小口の見出しで、場所の見当をつける。

この辞書の見返しに五十音順索引があります。「は(は行)のところを見ると、それに対応するページが小口の黒い部分でわかります。片手に辞書をのせ、親指で小口を軽くおさえながら、ぱらぱらやって、はのどこ

ろでとめます。

(2) 柱見出しでページをさがす。

柱見出しは、そのページにあるはじめの見出しとおわりの見出しをしめすもので、ページの上の部分に横に印刷してあります。はのはじめのほうを見て行くと、バード↓バーンとあるページ(八一五ページ)が出ます。

(3) 見出しを見る。

八一五ページをざっと上から見ると、中の段に「パーベキュー」があります。この辞書の見出しは、現代かなづかいですから、現代かなづかいさえ知っていれば、だれでもさがすことがすぐ引けます。ただ、外来語の長く引く音は「ー」であらわしましたから、こんなときは、「バアベキュー」と考えてさがしてください。

2 見出しに見つからないことばのさがし方

知りたいことばが辞書の見出しにないからといって悲観することはありません。ひよっとしたらさがし方が悪いのかもしれない。たとえば、あなたは現代かなづかいを正しくおぼえていますか。「横着(おうちやく)」を「おおちゃく」でさがしてはいけません。「氷(こおり)」は「こうり」ではありません。「ケーキ」は「ケエキ」に当たるところをさがすのです。「気付く」は「きづく」のところにあります。が、「築く」は「きずく」のところでは

かなづかいをまちがっておぼえたために、せつかくのことばも出てこないとすれば残念なことです。この辞書で正しいかなづかいをたしかめておくことは、ことばを正しく

はやくさがし出すためにもよいことです。

もう一つ。ひよっとしたららことばをまちがえておぼえて
いることはありませんか。たとえば、「いばる」を「えばる」と
言ったり、「七福神(しちふくじん)」を「ひちふくじん」と
言ったりする土地があります。このようななままった形で
さがしてはいけません。また、「首相(しゅしゅ)」「を」「し
ゆそう」と読んだり、「上屋(うわや)」を「じょうおく」と
読んだりすると、ほしいことばが見つかりません。

辞書を正しく使うということは、気がつきにくい、こと
ばのなまりや漢字のまちがった読み方をなおす、ひじょう
により機会なのです。

正しくさがしても、知りたいことばが見出しに出ていな
いことはもちろんあります。そのときは、次の方法でさが
すと、うまく行くことが多いのです。

- (1) この辞書では、慣用語・ことわざは、用例として出
してあります。

例 こういん「光陰」(名)「文」……。「一矢のごと如し」(「月日のた

つことのはやいたとえ」)

- (2) 単語以下の、語を構成する要素(接頭語・接尾語・造
語成分)のついたことばは、分けて出したものもあり
ます。たとえば、「優勝杯」^{ひょうしょうはい}「新しさ」などは「優勝」
と「杯」、「新しい」と「さ」に分けて出しました。

- (3) 意味のすぐわかる複合語や類推のきく複合語は、分
けた形で出したものも多いのです。

- (4) 「ひよっとしたら」と「ひよっとすると」のように、

形のひじょうに似たことばは、一つにまとめました。

(このばあい、「ひよっとしたら」の解説のおわりに、同意語
の資格で「ひよっとすると」が出ています。)

- (5) 「悲しい」からみちびかれる「悲しさ」「悲しげ」「悲
しがる」(派生語と呼びます)のようなものは、「悲しい」
のおわりに「悲」としてことばだけを出しました。

例 かなしい「悲しい・哀しい」(形) ……。「悲しい」がる(自五)
―げ(形動名)―さ(名)。

- (6) 名詞の形に対応する動詞の形、自動詞の形に対応す
る他動詞の形など、対応する関係がすぐわかることば
は、解説のおわりにその形を出しました。

例 こまる「困る(自五) ……。「困難(困らす)(五)。
あてつ・ける(当て付ける)(他下二) ……。「困当て付け」。

- (7) 「書く」からみちびかれる「書ける」「書くことができ
る」の意味」のように、可能の意味をあらわす動詞
(可能動詞と呼びます)の形は、もともになる動詞の解説の
おわりに「可能」として出しました。

例 かくす「隠す(他五) ……。「可能(隠せる)(自下二)。

- (8) ある種のことばは、見出し語の解説の中にだけあら
われます。たとえば、国の首府の名は、その国の解説
の中に、原語を入れてしめました。また、おもな元
素の記号も、その元素の解説の中にあります。

このように、辞書の性質をよく知り、辞書の特徴をじよ
うず利用すれば、見出しに出ていないことばについても、
いろいろ知ることができるのです。こうすることによって

辞書のねうちは何倍にも高まることがわかるでしょう。

3 見出しの配列のうち、同じかなのことばが続くときの約束

日本語には、おなじかなのことばが多いので、この辞書では、次の約束によって配列してあります。

(1) たとえば「請う」と「功」のように、かなはまったく同じ(どちらも「こう」)でも、発音のちがうものがあります。「請う」はコウ、「功」はコーと発音するのがふつうです。このようならば、まず発音で大きくコウの部とコーの部に分け、それぞれの中を、(2)以下にのべる手続きを順番にあてはめて、さがすことばがすぐ見つかるようにくふうしました。「請う」「功」の同類以外は、(2)以外の手続きから出発します。

(2) ことばの構成については

① 接頭語とことばの頭に立つ造語成分の組

② 接尾語とことばのおわりに立つ造語成分の組

③ 単語と連語の組

の三つに、まず分けてならべます。

(3) かなの清音、濁音に目をつけて、

清音↓濁音↓半濁音の順にならべます。

例 はん[藩] ばん[番] ばん

(4) つまる音をあらわす「っ」、よう(拗)音をあらわす

「や・ゆ・よ」、外来語をあらわすための「ア・イ・エ・オ」などの小さな字は、そうでない大きな字の前にならべます。

例 てつき[敵機] ↓ てつき[手付き]

ひやく[百] ↓ ひやく[飛躍]

ファン ↓ ふあん[不安]

(5) 漢字をあてる見出しを先にならべ、あてない見出しをあとにならべます。

(6) 漢字をあてる見出しについては、一字めの漢字の画数の少ないものから多いものへとならべます。一字めの画数が同じときは、二字めの画数順です。

(7) 漢字の画数が同じときや、漢字のない見出しのときは、次の基準によります。

① ことばの種類については、和語・漢語・外来語の順にならべる。

② 品詞の区別については、活用しない品詞を先に、活用する品詞をあとにする。おのおのについては、名詞・代名詞・副詞・連体詞・接統詞・感動詞・助詞、および、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞の順。

三 目的に応じた辞書の使い方

1 かなづかいが知りたいとき

(1) 現代かなづかいが知りたいときは、見出しを見てください。この辞書の見出しは、すべて現代かなづかいによっています。また、外来語は、「外来語の表記」(昭和二十九年三月、国語審議会報告)その他の適当と思われる基準に従っています。

(2) 歴史的かなづかいは、見出し漢字欄の下にカタカナ

で出してあります。

例 はい「仄」ハヒ(名)

歴史的かなづかいは、和語についてだけしめました。

2 外来語について知りたいとき

- (1) 外来語であるかどうかは、見出しのかなの種類を見るとよいのです。室町末期以後西洋諸国からはいってきた外来語は、見出しをカタカナで出しました。

例 ガス(名) チョコレート(名)

注意 カタカナで書く習慣が固定している和語は、カタカナでしめます。

例 ハ(名)「音」

- (2) 外来語の原語は、品詞欄の次の「」を見てください。「」の中には、つづりをしめし、英語以外はもとの国語の名をつづりの前に出してあります。(外国語の名前の略語表はうしろの見返しにあります。)

例 インターバル(名)「interval」

例 シャンソン(名)「chanson」

また、発音が原語からずれているとき、省略した形であるとき、人名・商品名などのばあいは、いちいちもとの発音をしめしたり、そのことをことわったりしました。

例 シヤン(名・形動タ)「シエン(動・schiön)の変化」

例 ジャガイモ「一芋」(名)「↑ジャガタ(オ)「acata」ゴモ」〔植〕

例 レントゲン(名)「röntgen=人名」

例 ナイロン(名)「nylon=商品名」

注意 護謨(ゴム)、窒扶斯(チフス)などのように、漢字を

3 あてる表記は、原語の下に注記の形で出しました。

漢字のあて方・使い方が知りたいとき

見出し漢字の欄を見てください。

- (1) 当用漢字であるかどうかの区別。

例 あいさつ「挨拶」 わに「鰐」

例 じゅうなん「柔軟」 および「及び」

例 しるしのついていない漢字は当用漢字です。

例 あんとん「行燈」 そらす「逸字」

- (2) 当用漢字音訓表にみとめられた読みであるかどうかの区別。

例 のついていない漢字の読みは、当用漢字音訓表にみとめられていません。

例 とじる「閉じる」 そち「措置」

例 あて字であるかどうかの区別。

例 ..のついていないものは、あて字・熟字訓じゆじゆんなどです。..のついた漢字には、..をつけません。なお、あて字と

そうでない漢字とのさかいめに「」を入れました。

例 えび「海老」 えびちや「海老茶」

- (3) ..のついていない漢字は、当用漢字で、しかもその読みが音訓表でみとめられたものです。

例 (2) ..のついた漢字は、かなで書くか、同じ読み

のほかの漢字で代用するか、ほかのことばで言いかえ

るかの漢字で代用するか、ほかのことばで言いかえ

るかの漢字で代用するか、ほかのことばで言いかえ

るかの漢字で代用するか、ほかのことばで言いかえ

るかの漢字で代用するか、ほかのことばで言いかえ

るかの漢字で代用するか、ほかのことばで言いかえ

るかの漢字で代用するか、ほかのことばで言いかえ

るかすることがのぞましいのです。この辞書では国語審議会報告「同音の漢字による書きかえ」(昭和三十一年七月。いわゆる代用漢字)の案を取り入れたほか、日本新聞協会の用字集、その他実際の用例にもとづき、適当と思われる表記や言いかえをしめしておきました。

(4) 学習漢字であるかどうかの区別。

教科書体活字で印刷した漢字は学習漢字です。学習漢字とは、教育漢字ともとの備考漢字(どちらも通称です)をまとめた呼び名です。教育漢字は、正式には、「当用漢字別表」と呼ばれる表にある漢字です。これは当用漢字一八五〇字のうち、義務教育期間中に読み書きともじゅうぶんにできるようにしなければならぬ、たいせつな漢字の表で、全部で八八一字あります。

例 がっこう〔学校〕 よろこぶ〔喜ぶ〕

備考漢字は、教育漢字に対して追加された漢字で(昭和四十三年七月)、全部で一五字あります。

例 域 簡 磁 泉 宝 朗 など

新しい「小学校学習指導要領」(昭和五十二年七月)では、教育漢字と合わせた九九六字の表として示されています。学習漢字も、音訓表にない読み方をするばあいには、(2)の《や(3)の…がつきます》。

例 こおる〔凍る・氷る〕 まめ〔忠実〕

(1)~(4)を利用して、漢字のあて方・使い方の正しい区別を、ことばごとにその場で知ることができます。

注意 人名に使える漢字の表(人名用漢字別表)・当用漢字

補正資料については、一八四ページを見てください。

(5) 見出しのかなと漢字の関係

日本語は大部分が漢字で書けます。漢字で書くことはひじょうに多くは漢字二字です。見出しのかなの部分は、この事実を考え、かなのひとかたまりが漢字の一つに当たるよう、切れ目を入れました。

例 うらおもて〔裏表〕 きこう〔技巧〕

複合語や特殊なものは適当にまとめました。なお見出しの切れ目は大部分、語の構成の切れ目と一致します。

4 新しい送りがなのつけ方が知りたいとき

見出し漢字欄を見るとわかります。当用漢字で書けないものについても、新しい送りがなの精神にしたがつた送りがなをしめしてあります。当用漢字以外の漢字についても送りがなを送ることが現実におこなわれているからです。

新しい送りがな法は、かなを送ることを決めた本則とその例外、読みまちがえるおそれのないばあいにはよくことのできる許容の三つからできています。この辞書は、まず基本をあやまりなくおぼえていただくため、本則と例外だけをしめすことにしました。

注意 許容の大部分は、送りがなをばくばあいですが、「表わす」(本則「表す」)「行なう」(本則「行う」)のように、多く送ってよいばあいもすこしあります。

5 文法上の知識を得たいとき

見出しと品詞欄などを見てください。

(1) 語の構成は、見出しの切れ目を見るとだいたいわか

- ります。これについては三三の(5)を見てください。
- (2) そのことばが接頭語・接尾語・造語成分などのばあいは、見出しに―があるから、すぐわかります。もちろん、品詞欄にも、そのことは書いてあります。
- 例 ―しゅ〔首〕(接尾) しゅう―〔終〕(造語)
- 注意 「新」のように名詞の用法もあるものは、同じ見出しの「一、二」としてまとめました。
- 例 しん〔新〕(名) ……、二(造語)〔新〕……
- (3) 品詞と活用は、品詞欄を見てください。品詞と活用の略語は見返しにあります。
- (4) 単語と連語との区別は品詞欄にしめました。
- 例 物のみに「物に見事」(連語)
- (5) 活用のあることばの、上にあつて変化しない部分(語幹)と、下にあつて変化する部分(語尾)とのさかいは「・」でしめしてあります。
- 「・」の下が変化する部分です。
- 例 はたらく〔働く〕 たのしい〔楽しい〕
- 注意 (1) 形容動詞は語幹の部分を見出しにしているので、「・」はつきません。
- (2) 「うわさする」「信用する」などは
うわさ〔噂〕(名・他サ) しんよう〔信用〕(名・他サ)
のように、語幹で代表させました。
- (3) 助動詞には語幹と語尾の区別をみとめませんの
で、「・」はつきません。
- (6) そのことばの名詞の形・動詞の形・可能動詞の形・

6

- 派生の形などは、解説のおわりにあります。もつともその形が見出しに出ているばあいは省略しました。
- 例は二二の(5)～(7)、三七の(2)～(4)を見てください。
- ことばの意味・用法の求め方
- (1) そのことばの、現代語としての基本的な意味は、原則として○に書いてあります。特に、基本語のばあいは、○を読むと、そのことばがわれわれの現代生活の中でどんな感覚のもとに受け入れられているかがわかります。
- (2) いろいろな意味・用法があるときは、基本的なものから始め、変化のとちゅうのようすがうまくあつづけられるように、連絡に注意してならべました。
- (3) 特別な意味・用法などは、だいたい、ふつうの意味・用法よりあとに書いてあります。
- (4) 省略した形のばあいは、もとの形をしめして、最後にのせました。ほかの項目を参照させるばあいは最後にのせました。
- (5) 文章語〔現代語のうち、文章などに使われる、話しことばとの差の大きいことば〕、方言的用語、俗語、女性用語、専門分野で使われる用語については、なるべく「」の中に略語などを入れてことわりました。
- (6) この辞書の見出しはほとんどすべてが現代語ですが、古典にあらわれる過去のことばもすこしはいつています。これには「古」のしるしをつけて、それが現代語でないことを明らかにしました。

(7) ことばの理解を深めるため、 Δ で、できるだけ皆さんの参照項目、関連項目をあげるように努力しました。

7 同意語・反対語・派生語などの利用のしかた

知っていることばのわくを広げたいとき、ことばの使い方を発展させたいときや深めたいとき、また、ことばを正しく使いたいときは、そのことばを生活のいろいろな場面を使ってみることがたいせつです。また、同意語・反対語・派生語などをおぼえることもひじょうにたいせつです。ことばの深い内容や、一口には言いあらわせない微妙な味わいなどは、同意語・反対語などといっしょにおぼえることによって、いっそうたしかになるものです。こうすることによって、ことばを裏と表の両方からたしかめることができます。

(1) 同意語は、解説のおわりにあります。

(2) 反対語は、(↑・↓)の形で解説のおわりにあります。

例 かいかん〔開館〕(名・自他サ) ⊖ …… ⊕ …… ▽ (↑閉館)

(3) 派生語は、(派生)として解説のおわりに出しました。

(4) 名詞に対応する動詞の形 (動でしめす)、動詞に対応する名詞の形 (名でしめす) などの対応語は、解説のおわりにあります。

例 なりあがり〔成り上がり〕(名) …… (動) 成り上がる (自五)

とりかえる〔取り替える〕(カヘル) (他下一) …… (動) 取り替える

(自動) 取り替わる (五)

つきさす〔突き刺す〕(他五) …… (自動) 突き刺さる (五)

8 ことばの使い方について知りたいとき
解説のあとに、「」でついで説明してあります。どういうときに、どんな相手に、どんな気持ちで、などということができるだけくわしく書きました。

四 おもな記号

紙面の節約のために、次のような記号を少し使いました。

…(…) 例 のつば(名・形動) Δ せの高い(こと・人)

…(…) 例 ながびく〔長引く〕(自五) (予想したより) 長くかかる。

…(…) 例 ほころびる〔綻びる〕(自上) ⊖ …… ⊕ ……

▽ ほころぶ

…(…) 例 ホステス(名) ⊖ …… ⊕ …… ▽ (↑ホスト)

…(…) 例 ⊖ …… ⊕ …… ▽ (↑ホスト)

…(…) 例 ⊖ …… ⊕ …… ▽ (↑ホスト)

すべて、この辞書の解説で、「」は注記の役目をしていきます。() は、本文の一部分です。そのほかの各種の記号・略語は、見返しにくわしくのせてあります。

この辞書がみなさんのよい相談相手になりますように。

あ

あ「亜」(接頭) ……に次ぐ。「一熱帯」

ア(造語) ①↑アジア。「東南」 ②↑アフリカ

「南チ」 ③↑日本アルプス。「南チン」

あ「亜」(名) ①↑アジア(亜細亜)。「一欧(オウ)ああ」(嗚呼)「感」 何かに感じて出す声。「おどろき、悲しみ・喜び・なげき・呼びかけなどをあらわす」

ああ副 ああのように。「一」

アークード(名) [arcade] ①まるい屋根のある通路。②商店街(ガイ)の道の上に、屋根のようにかぶせたおおい。



【アーケード】

アース(名) [earth] ①地球。大地。②「理」[テレビ]・せんとく(洗濯)機などの電気機械と地面との間に回路を作る装置。接地(セッチ)。

アーチ(名) [arch] ①道の左右から、石などをつなぎ上げて、弓形の天井(積み上)を作ったもの。②竹や木の骨組(ホネ)のみをスギ・ヒノキなどの青葉で包んだ間。緑門(リョクモン)。「一」野球で「ホームラン」をかける。「一」(ホームランを打)」。③「一」



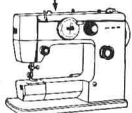
【アーチ①】

アーティスト(名) [artist] 芸術家。アーティスト。アート(名) [art] 芸術。美術。技術。

アーベント(名) [Abend] 夕方。ゆうべ。「一」

アーベント(名) [Abend] 夕方。ゆうべ。「一」

アーム(名) [arm] ①うで。「バック(うで)に下げるハンドバッグ」 ②「電話」の受話器(シユワキ)。「一」(受話器)の本体部分。「一」(ホー



【アーム②】

ル) (名) [armhole] 「裁」そでぐ。そでぐ。

アーム(感) (名) [arm] (アライアメント) (キリス) ト教(まこと)、自分も同じであるという気持ちで、いのり(まわり)につけることば。

アモンド(名) [almond] 「植」(くだもの) (名) (実) (平) たく。たはは薬用・食用。「一」(チョコレート) アル(名) [face] 面積の単位(記号 a)。「一」アルは百平方メートル。

アルイー(名) [RE] (名) ローターエンジン。「一」車アルイー(名) [Rh] (名) 「生」人間(の血液の成分の一つ) (因子) が母体と胎児(タイン)の間で「一致」(マッチ) してなると、生まれてすぐ重なおうたんになったり、死んで生まれたりする。

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

あ「一」相(アヒ) (接頭) 「おたがいに」 ともに。「一」

～は当用漢字外、一は当用漢字音訓表外、無印は当用漢字とその音訓、..はあて字・難訓。

あ

あいぎ〔合着・「間着」アヒ(名) ①上着と下着とのあいだに着る衣服。②ウあひぐ。〕客。
 あいきやく〔相客アヒ(名) 同じ・席(宿)にいて、あいきょう(敬・愛)媽(名) ①にくめなく、かわいらしい身ぶりやふるまひ。「をふりまく」②人を楽しませるユーモアのあること。「失敗したときに」今の「は」だ。③客を喜ばせるための、ちよつとしたせももの。「こ」にガムをさしあげます。④愛郷を愛すること。「一心」 ⑤自分の生まれた故郷を愛すること。「一心」 ⑥短刀。ひしゅう(七首) あいくち〔合口・と首アヒ(名) ①つづ(鑄)のないあいくち〔合口アヒ(名) ①が悪い。②よく意志が通せず、話があわない。③「すもうで」に手だ。〕
 あいくるしい〔愛くるしい〕(形) ①子どもなどの顔が「まるまるして、かわいらしい。「笑い顔」 ②派生 ③「げ(形動) ④さ(名) ⑤犬をかわいがること。「一家カ」 あいこ〔相子アヒ(名) おたがいに勝ち負けのないこと。勝負。〕(これで「だ」) ①「愛顧」(名・他サ) ②「顧は、目をかけること」〔文〕ひいきひきたて。「こ」をこむ(愛)る。 あいこ〔愛護〕(名・他サ) 愛情をそいでまもること。 ①「動物」 ②「愛好」(名・他サ) ③「好ま、平和にする」 あいこう〔愛校〕(名) ①自分の学校を愛すること。 ②「一心」 ③「愛国」(名) ④自分の国を愛すること。 ⑤「あいこくは〔合い言葉〕アヒ(名) ①味方だということを知らせるためのあいさすに使うこと。②多くの人が申しあげたようにくり返す、共通のことば。 あいさす〔愛妻〕(名) ①たいせつにしている「つま」 ②「つまをたいせつにすること。「一家カ) あいさす〔挨拶〕(名・白サ) ①人と人とのたよなげに、おにぎやしたしみの気持ちをあらわすこと。また、そ

ういうときのことば。「ごんには」といする。お客様にご「なさい、別れの」②「集会などで」感謝したしみの気持ち、自分の考えや気持ちなどをかんたんにあらわすこと。ことば。「一言ひとこと」を申し上げます。③多分は儀式(ギンギキ的・儀礼)を申す。④「相手」のことばであわさる「返答。「そう言われても」に「まる」ひい(あいさす)。 あいじ〔哀史〕(名) 〔文〕かたしい物語。「女工」 あいじ〔愛児〕(名) かわい(自分の)子ども。いと。 アイシー〔C〕(名) 〔理〕集積回路。 あいしや〔愛士〕(名) ①自分のつとめている会社を愛すること。「一心」精神。 あいしや〔愛車〕(名) ①自分の車。②自動車。だ いじにする。③「精神」 ④愛用の車。⑤自動車。 アイシャドー(名) eye shadow) ①愛用の車。②「またに塗る」青・はいい色などの化粧(ケシヨウ)品。アイシャード、 あいしゅう〔哀愁〕(名) もの悲しさ。ほのかに。 あいしよ〔愛書〕(名) 本が好きなど。「一家カ) あいしよ〔相性・合性〕アヒ(名) 男女の気性(キシヨウ)が、うまくあつること。「が悪い」 あいしよ〔愛称〕(名) ①したい間から呼びあう名前。②親愛の気持ちをふくめて呼ぶ名前。 あいしよ〔愛唱〕(名・他サ) 好き歌うこと。「歌」 あいじょう〔愛情〕(名) ①愛する心。②異性を、あいにし〔合い印アヒ(名) 味方だということを知らせるための目じるし。 あいじん〔愛人〕(名) ①恋愛(レナイ)をする相手の人。こいびと。②情婦(シヨウ)の新しい言い方。 アイシング(名) icing) ①「料」ケーキなどに塗るつける、砂糖の上皮(ウワカワ)。 「下」)。 あいす〔愛す〕(他五) あいす。 ①「愛する(自)アイヌ(名) ice) 氷。「コーヒ」 ②「アイスクリム」 ③「キャンデー」(名) ④「和製英語」は candy) 棒氷の形をした氷菓子(ガシ)。 ①ク

リーム(名) ice cream) 牛乳・砂糖・たまごの黄味(キミ)をまぜあわせて凍(コオ)らせた菓子(カシ)。氷菓子。 ケーキ(名) ①「和製英語」ice cake) ②牛乳の脂肪(シボウ)分が3%に達しない、アイスクリム。 ③アイスクリームを台にした、デコレションケーキ。 スケート(名) ice skate) 氷の上で走る、スケート。 ホックス(名) icebox) 氷を使う、てがるな冷蔵庫。 ホッケー(名) ice hockey) スケートをはいするホッケー。 リンク(名) ①「和製英語」ice rink) スケートをする、氷をはった広い場所。スケートリンク。 あいす〔合口アヒ(名・白サ) のことを知らされた、前もって約束(ヤクソク)した。目じるし(方法)。 また、そういう方法で知らせること。 アイスパーン(名) ice pan) 雪の表面がかたまつて氷のようになった状態(ノスキ場)。 あいすべき〔愛すべき〕(連語) 〔文〕かわいらさが感じられる。「少年」 アイランド(名) island) 〔地〕大西洋北部の島。独立共和国。首府(レイキヤビク Reykjavik)。 あいす〔愛する〕(他サ) ①「愛の気持ちをおこない」にあわす。かわいがること。「子どもを」 ②「好む、好きだ。「詩を」 ③「気に入つてたいせつにする。♡愛す。④(きくむ) あいせき〔合い席・相席〕アヒ(名) 〔飲食店などで〕よその客と同じ席につくこと。「でお願いします」 あいせき〔哀情〕(名・他サ) 〔文〕人の死などを「おしみ悲しむこと。〔弔辞(チヨウジ)などで使) あいせき〔愛惜〕(名・他サ) おしがること。なりおしき。①「情」 あいせつ〔哀切〕(名・形動) 〔文〕あわれで、身につまされるようす。 ②「陰性」 さ(名) ③「み(名) あいぜん〔愛染〕(名) 〔仏〕↑愛染明王(ミヨウ) ウ。 ①「さん」 ②「みょうおう」(愛染明王) (名) 〔仏〕衆生(シヨウ)を愛欲からすくひ仏法を守るという明王。